ユートピアの葉

きい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ユートピアの葉

【Ｎコード】
Ｎ８９８３Ｉ

【作者名】
きい

【あらすじ】

サラリーマン生活に嫌気がさした二十九歳のエイジ。
脱サラを決めて「何か」をしたいと思うが、肝心な「何か」はまだ闇の中。
かといって、その闇が晴れても「何か」があるかどうかも分からない。
自分探しなんて高価な言葉は似合わない、そんな男の話です。

?

刺激の少ない日々だった。
かといって刺激を求める勇気も無かった。
日々はただただ足早に、それも忍び足で目の前を通り過ぎていくだけだった。いくら音の無い足音といっても、目の前を通ればこの僕でもさすがに気付く。ただ、気が付いているにもかかわらず気が付かない素振で見て見ぬフリをしているだけだった。
肉体的な成長がピークを迎え緩やかなカーブを描いて落ちていく中にでも、精神的な成長は止まることを知らないはずだと、ある人は言う。確かに年を重ねれば俊敏さも落ちてくるし、体から嫌な臭いも漂い始めてきて、これから出来ることはどうしても限られてくることを知らせる。例えるなら、八十キロのスピードでまっすぐ飛んでくる白球もろくにバットに当てられない二十九歳の僕が、プロ野球の選手をこれから目指すわけにもいかないということだろう。かといって精神的な成長ですら、十七歳から何も変わらないとしか思えない僕には、それも期待できないしいまさら何をどうすればいいのかが分からない。
時間は残酷に僕の若さという可能性と夢と希望を蝕んでいく。いや、それは正確な表現ではない。若さは蝕まれる。けれども夢と希望は蝕まれることは無い。なにしろ、夢と希望が無いからだ。
ある人は言った。何不自由の無い現代の生活に育った若い連中は、なにか一つ些細なことでも、嫌なことがあったり手に入らないものがあれば男女の垣根無くヒステリックを起こすと。それが最近の世相を現すような凶悪な事件を引き起こすのだと。
それについて僕としては色々と言いたいことがあるのが本音ではあるが、ご他聞に漏れずに言いたいことも言えない世の中の中で社会的に生きている僕は、そういう類の話は右の耳に入れた後、すぐに左の耳から出すことにしている。残るのは愛想笑いだけだ。僕と

しては防御策を張ったつもりだったのだが思いもしない弊害もあった。そういうことを繰り返しているうちに、僕の頭の中は素晴らしい音楽を聴いても綺麗な風景や夜景を見ても、絵画を見ても、斬新な手法のオブジェを見ても、何も感じなくなっていった。唯一、綺麗な女性を見た時に性欲を感じるくらいで、他の感覚が鈍化されるにしたがって、この感覚がより鋭敏になってきているのを感じる。

もちろん僕は性的な対象としてならば男性よりも女性の方が好きだし、綺麗な女性はなお好きだし、胸が大きかったりだとか形のいい尻をしている女性を見れば当然、欲情する。だけれども、言いたいことはそういうことではない。

例えばある日曜日に友人の誘いで美術館へ行ったときのことだ。その時に展示されていたのは様々な革新的な手法で作られたアート作品だった。そもそもその展示会のことを僕は電車の中吊広告で知ったのだが、とても興味深くて一人で見に行っても構わないと思っていた。誘われたのはたまたまだった。声をかけてくれたのは仕事で知り合った人物で年齢も近く、直接的な仕事の関わりが無かったのだが、それが逆にきっかけでフランクな関係になった人だった。美術館に入り、チケットを買い、中に入っていくと爽やかにひんやりとした空気と美術館特有の硬く大らかな雰囲気が僕を高揚させた。足取りも軽快に作品を見ていくと確かに面白いことは面白い。が、正直あまり記憶には残らなかった。作品よりもその友人のことが気になって仕方がなかった。なにせその友人が女であったからだ。それも均整の取れた顔立ちの美人であって、しかも胸と足の形も綺麗な子だった。低い台の上に置いてある作品を見るときに前かがみになる彼女の胸元のほうが、そこにあったどんな芸術作品よりも魅力的に見えた。歩きながら話す会話よりも、ヒールを履いている彼女の足の甲から沿うように伸びている、なだらかな曲線が交差するのを見るほうが楽しかったし、時間が経つのも早かった。

ある意味ではそれが正しい。むしろ人間の一つの真理ともいえるだろう。けれども今まで僕は女性と一緒にでも美術館に行けばその

作品を楽しめたし、映画に行けば夢中で見ることができた。その後にする食事では見た作品について話すことが好きだった。僕としてはそういった変化に大きな違和感を覚える。まるで最後の危険信号かのようにも思える。

そして休みが明けて、平日の五日間ないし六日間は会社へ向かいルーティンワークを行い、イマイチと人に言われ、各方面に頭を下げ、夜中に狭いアパートへと帰る。小さなバスルームでシャワーを浴び、埃の多いフロアリングに布団を敷き、寝る。そして気が付くと朝の光がその日もまたどんよりと薄いカーテンを貫き、目が覚める。

「つまりこれが俺の人生かな」

「自分で選んだんだろ」

「洗脳されてたんだよ。とにもかくにも就職して働かなきゃ人間じゃないってさ」

「そりゃそうだろ。身をすり減らしても就職して働く。その方がいいんじゃないか。それに就職しなきゃ人間じゃないなら、俺は毛の少ないサルかなにかってことになるのかな」そう猿山は言いながら、三分の一に減ったビールを湿ったコースターの上に丁寧に戻した。

「気楽で良いじゃん」

「自由業は不自由業だけどな」と、猿山は気楽そうに言った。

「自由業っていっても、フリーターだろ」

「この間の最終まで通った賞のプロフィールにはフリーターって書いたんだけどな、雑誌にはフリーに書き直されてたよ」

「雑誌的にもフリーターじゃ載せられなかったんだ」

「だから俺はフリーってことにしたんだ。つまり自由業者。本業での収入はまだゼロだけどな」

「作品を作る金を入れたら赤じゃないのか」

猿山はくすんだ緑色の枝豆を見つめながら、溜息をついた。

「まっかっかだよ」

「昔はさ、酒は楽しむために飲んでたんだけどな。いまは嫌なことを忘れるために飲んでるよ」僕は空になったグラスを振り、テキーラトニックをもう一杯頼んだ。もう六杯目だ。
「じゃないと若いのが凶悪な事件をやらかしちまうからな」猿山はさも楽しげに枝豆の豆を取り出し、口に運ぶ。
辺りを見回すと不景気のせいか、金曜の大衆居酒屋だというのに人の入りはまばらだった。若い店員が十字に重なる通路に集まり笑顔で話している。
「俺達の将来ってどうなるのかな」
「あんまり明るくはないな」
「これからこの国はどこに向かうのかな」
「まずは選挙に向かわないとな」僕はその言葉を聞いて、さらっと上手いことを言えるもんだなと、感心した。
「俺の座布団やるよ」座っていた座布団を差し出した。
「いらねぇよ」
そう言ってから、猿山は十字の通路にいる店員に向かって大きく手を上げてから、空になったジョッキを高く掲げて七杯目のビールを頼んだ。
「でも、」と猿山は口を開いた。「少し変わったかもしれないな。もっと純粋無垢な気がしてたよ、エイジは」
「俺も少しは大人になったってことかな」おどけて言った。それに対して猿山は、ああそうだなと一言だけ言うと、すたすたとやってきた女性の店員から泡のしぼんだジョッキを受け取った。その子の背は低く線が細い。顔は瞳の大きさが目立つ、かわいい丸い顔をしている。猿山は満杯になったジョッキを受け取り口を付ける。口元に付いた貧相な泡を拭きながら、
「仕事は辞めてこっち帰るんだろ」と言った。
「再来月の二十日に退社して、こっちには来月末に帰ってくる。通えない距離じゃないから」
「エイジが帰ってくると、この町も明るくなるな」

「間違いない」
「で、それからどうするんだ」
僕はその問いに対して、どう答えようか迷った。僕はいったいこれからどうするのだろう。「前のような純粋無垢になりたいよ」ただの思い付きで言ったが、笑いながらは言わなかった。
「後ろを見ても仕方が無いんじゃない。前を向いて行かなきゃさ」と、真面目な顔をして答える猿山に悪い気がした。
「本当はさ、勉強しなおしたい」
「なんの？」
「実は分からない」
「自分探しの旅にでも出るのか」猿山は箸を伸ばしながら言った。
「そういうつもりはないよ。だって自分はここにいるじゃないか」
「自分はここにいる、か。自分を創るための旅になら出てもいいんじゃないのか」
「もう十分に情報過多なんだよ。きっと。俺は何を選んで捨てればいいのかが分からない」
「分からないことばかりだな」
「分からないことばかりだ」僕はうつむく。口からはアルコールの臭いがした。
「お互い前しか進めないんだから進むしかないんだよな。あんまり考えすぎないで元気出せよ」
「猿山みたいになりたいよ」
「珍しいな、エイジがそんなことを言うのは。打ちのめされたか」
「自信は無くしたよ。勘違いとか、思い込みとか、理屈がなくても自信だけはあったのにね。それが良い事なのか悪い事なのかは、これまた分からないけど」
「きっと、エイジはこれからがスタートなんだよ」猿山は屈託なく微笑んだ。僕は社会人になり営業スマイルや愛想笑い、それと嘲笑い。そんな笑顔ばかりを見てきた。酒はおろかチェイサーも喉を通らないほど気持ちが落ちてくることばかりだった。しかし実際に

は僕も同じような思いを他人にさせてきていただろう。だけれども、そのことを他人は大抵気付かない。それは痛みの無いカンナで少しずつ削っていくことに似ていて、きっと少しずつ誰かを傷つけている。だが、いまの猿山のその表情には人はこうやって笑えるんだった。そう思い出すことの出来る純粋な笑顔があった。

猿山は専門学校を卒業してから、ひたすら洋服のデザイン画を書き、コンクールに送り続けている。実家に暮らしているが、日払いの、主に引越しのバイトをしながらなけなしの多少の金を家に入れつつ国に入れつつ、アイディアに必要な物を買ったり、見に行ったりしている。デザイン画選考を通過すると、現物を作らないとならないので生地を買ったりする分の金も貯めているようだ。なんでも作るときには何十メーターの生地を使って一着の服を作ることもあるそうだ。二ヶ月前に新人の登竜門である大きなコンクールの最終選考まで残った。そのとき作成した服は服としては機能しないくらいに重たかった。猿山は言った。こういうのはリアルクローズじゃないからさ。昔の十二単も似た様なもんだよ。あれはリアルクローズと言えるのかもしれないけど、と。そのやたらに肩が凝る鎧のような服は、雑誌にも載ったし、モデルがその服を着てランウェイも歩いたが入賞までは果たさなかった。果たさなかったものの最終選考まで残ったということがあればどこかのアパレルかデザイン事務所へでも入れる看板になるだろうが、本人としてはまだ足らないんだと言い、そのまま独学で作品を作り続けている。僕はといえば名前も聞いたことも無いような大学へ入り、のらりくらりと生活をしつつ、遊びつつ、四年間を過ごした。いま思えばただ時間を浪費していただけだった。永遠の若さなんて言葉は必要ないと思っていた。僕は大学での暇な時間を持て余していた。仲間はそろそろと就職活動をし始めて、会うときの会話もあそこの企業のエントリーシートがなんだとか、締め切りが何だとか、最終で落っこちちゃったとか、そういう類のものが増えてきた。だから僕は何となく就職活動を始め、運よく内定を取り就職した。

僕が就職したころはまだよかった。今は、この時風の煽りで業績は芳しくなく、採用したものの経費ばかりかかる若手社員にまで風当たりが厳しい。定年まで数年という人にもプレッシャーをかけられていたが、さすがに経験の差か、かわすのが上手かった。社内の爆風を避ける技量もなければ隠れる盾もない若手社員がかわいそうだった。その光景を見ていると嫌気が差していた会社生活がさらに嫌になり、僕は退社することにした。本当は僕たちの年代が稼がないとならないのだが、度重なる会議でも本体と現場での温度差があって何の建設的な議論は出来なかったが、きっとそれはよくある話で珍しい話ではないと思っている。

新入社員の内定取消話なんかを耳にするが、僕としては中途半端なキャリアでプレッシャーをかけられるよりもずっとマシな気がする。ともかく退職届を出したのが一週間前の話だ。上司にはやりたいことがあるから辞めますと言い退社の意思を伝えたのだが、その上司は、いまから焦っても手遅れだと思うけどせいぜい頑張ってくれとだけ言った。自分でも完璧に自由になるということに不安があるだけに、その言葉には渾身の右ストレートで顎を打ち抜かれた思いで、話が終わったあとにそこから立ち上がると膝が震えるようで上手に立てなかった。やりたいこともないのに手遅れと言われると、僕の中身は塵の一つ落ちていない完璧なまでに真っ白の部屋のような気がした。そこはきっと雨漏りとか隙間風が酷く、築年数が経っている。

「十年来どころか十五年来の友人になったな。それ以上か」猿山がぽつりと言った。

「中学生は、十四歳くらいか。そうしたら十五年だ」

「あの頃は十年来の友達って言ったら、入園前から友達じゃないと十年来じゃなかったのにな」

「時が経つのはあっという間だよ」

「あの頃から、あんまり中身は変わってないな。お互いに」

「三十歳間近でしょっちゅうこうして二人で飲むなんて、想像す

らしてなかったよ。きっと家庭を持って会う機会が減るもんだとばかり思ってた」僕が言うと、猿山がすぐ頷く。
「お互い結婚が早いと思ってたんだけど、さっぱりだったな」
「これからさ」辺りを見回すと、先程の背の低い店員と目が合った。注文かと思ったのか、こちらに歩き出すその子に手を振り、違うと合図を送る。気立ての良さそうな子だ。
「今の俺たちにとって結婚どころか彼女を作ることも、それこそ夢を語るような話だな」
「事実は小説より奇なり。ちょっと違うか」
「俺はこう思うんだが、」と猿山は前置きを言った。そんなときは大抵難しい話が出てくる。「あの頃の俺たちにとって、二十前後で結婚するのが一番普通なことだったんだよ。俺たちだけの世界の中ではね。それが実際にその後の時代の流れと俺たちとの接点が変わっていたんだ。だから、きっとそこで歪が生まれた。」そう言った猿山は、枝豆の皮をすでに山盛りになっている枝豆の皮入れへ勢いよく放り投げた。枝豆の皮は雪崩のように崩れた。
「そしてその結果」猿山の言いたいことがさっぱり分からなかったが僕は口を開いた。「時が経ち、俺は無職になり猿山は収入の無いクリエーターになったってことか」
「つまるところ、そういうことだ」猿山は崩れた枝豆から顔を上げて僕を見た。「誰も予想はしてないことだった。というよりも予想できなかった。今から過去を振り返り考えれば、あの時あれをしたから今こうなんだって繋げることは誰にでも簡単に出来る。だけど、今から先のことを考えるのはどんなに裏づけがあっても予想以上の範疇にはない。過去を振り返って学ぶことは大事だけど、結局進めるのは前しかない。そこが深い霧の中のようだとしてもね。これは俺の持論だけど」
「さっきから何度も聞いてるよ」
「だからこそ、わくわくするんだろ。毎日が」大げさに両手を広げて天を仰ぐ。「この素晴らしき日々の中へようこそ。エイジ。次

は、いつどんな仕事をするのか分からないけど、無職だからって悲観することはないよ」

僕はそうかと頷き、猿山の考えを考えた。無職といえどもプライドを持って夢へと向かう猿山は、収入が無く悩みはしても嘆きはしないのだろう。だからその気持ちは分かる。けれども二つ忘れてはならないことがある。僕にはそういったプライドの持てる目標が無いということと、僕たちは資産家の育ちでもなければ逆玉の輿にも乗っていないことだ。僕はこれから実家へ戻るのだし、猿山はずっと実家暮らしだ。実家暮らしの収入無の二十九歳。男子。いや、男性。確かにわくわくはしてくる。

僕たちは飲んでいた六杯目のグラスと七杯目のジョッキを空にすると店を出た。地元の駅前の商店街はとてもひっそりとしていて人影は全く無かった。外は夜中の湿ったぬるい風が頬を軽く撫でて通り過ぎていく。今日は実家泊まるんだよな。というか終電とっくに終わってるもんな。俺の自転車あっちだから、じゃあまたなと猿山が手を振って路地を曲がり、消えた。女でも抱きに行こうか。必ずしもそういう話にならない友人との酒はいいものだ。

少し座ろうかと思い、辺りを見回すと、アーケードになっている広い通りの真ん中に自転車が何台か放置してあった。そこの脇にある、木で出来ている酷くくたびれたベンチが目に付いた。それは懐かしいものだった。確か小学生の頃だろうか、母親とこの商店街まで一緒に買い物へ出かけるのが日課だったとき、必ず焼鳥屋でレバーの串焼きを買ってもらいここに座って食べていた場所だ。

レバーは好き嫌いの多い食べ物の一つかもしれないが僕の好物だった。毎回買ってもらうのは決まってレバーだった。今でももちろん好物だが毎日のように食べたいかといえばそんなことはない。あるとき、いつものようにレバーを受け取りそのベンチへ向かうと手からレバーが滑り落ちた。あらあらと母親が仕方ないからもう一本

買おうねと言うが、僕はいらないと言った。わざとじゃないんだから気にしなくていいんだよと言ってくれたが、きっと一日一本と自分の中でも思っていたのだろう、いらないと繰り返した。そうしているとその焼鳥屋の主人が近づいてきて、気をつけるんだよと一本のレバーを手渡してくれた。僕はまさかそれを落とすわけにはいかないと慎重に受け取った。母親が主人の顔を見ると、御代はもちろんいりませんよ。いつもありがとうございます。レバーが好きな子は珍しいけど栄養がたっぷりだから、本当は子どものおやつには最適なんですよ。母親は礼を言い、僕も礼を言った。それからもレバーは買い続けていたが、主人とはたまに一言二言を交わすくらいだった。顔は覚えてはいないし、優しい人だったのだと思うがもちろんどんな人間なのかということは分からない。年齢はきっと三十歳中頃かそれ以上といったところだったと思う。

そのベンチに座り、綿で出来たジャケットの内ポケットから煙草を取り出して火を付ける。それから焼鳥屋の在ったほうを眺めると、煙草から漂う白い煙の先には十年前に作られた広い有料駐車場が見えるだけだった。思えば、駅から微妙に距離のあるところに大きなショッピングモールが出来てから、この辺りは寂れてきた。いくつかの飲み屋や歯医者やパソコン教室があるくらいで、丸一日シャッターが開かないところもある。その有料駐車場にいたっては、その一角の店舗が取り壊され、更地になり、コンクリートが流し込まれ、簡単な白線が引かれて、あっという間に完成したものだった。

しばらくその風景を見ていた。何か考えや思いが明確な言葉になるわけではないのだが、湧きあがってくる小さな感情を読み解いていく。それは決して幸福なものではないが、心地よいものだった。それに、その作業自体がなにかとても懐かしかった。

二本目の煙草に火を付けると、ふと人の気配を感じた。横を見ると若い女がいた。その女は両方の唇の端を持ち上げてから、軽い会釈をした。それから、「ライター持ってませんか」座ってる僕に覗き込むようにして話しかけてくる。瞳が黒く大きかった。

「持ってるよ。マッチ売りの少女になった気分だよ」僕はずっしりとしたジッポライターを彼女に差し出す。
「買わなきゃダメですか」
「いや、煙草に火を付けた瞬間に現れたから。俺の幻覚とか幽霊とかじゃないよね」
「かもしれないですね」彼女は微笑んでライターを受け取る。ころころとした笑顔が可愛らしい。
「仕事帰り？」
「仕事というか、バイトですけど」
「学生さん？」
「はい」彼女はライターを手渡してくる。僕はそれを受け取る。それから火を付けたばかりの煙草を携帯灰皿へ捻りこみ、立ち上がった。
「好きなこと、勉強できてる？」
「ええ、まあ」
「それはいいことだね」そう質問した自分自身に年を取りすぎた思いがする。「この街はあんまり物騒でもないと思うけど、遅いから気を付けて帰ってね」と付け加えて、足早にその場から離れた。彼女がどんなスタイルでどんな服を着ていたかは、分からないままにした。
しばらく歩いてから煙草を取り出し、火を灯す。その灯りの向こう側は、まだ何も見えてはこなかった。

?（後書き）

読んで頂きまして、ありがとうございます。

今の気持ちとしてですが、４万字着地あたりを目指して書いています。

字数が万単位なんて書いたことがないので、とにかく無事に終わらせられるようにがんばります。

?

今日も強い朝の光がカーテンを貫き、どんよりと部屋を満たしていた。

起き上がり、パンをかじり、服を脱ぐ。それからシャワーを浴びて寝汗を落とし、シャツを羽織る。家を出て駅へと歩き、改札を通る。

今までで千回以上通ったこの通りも、あと数十回で終わりだ。ホームで人の固まりを乗せた地下鉄を待っていると、前髪が禿げてきている男性が並んできた。手馴れた様子で新聞を小さく畳み、読み始める。年は五十歳くらいか。彼は何回この道を歩いてきたのだろう。往復で考えれば一万回に近いのかもしれない。まさかとは思うのだが、その否定できない可能性を考えるだけで背筋がぞっとする。

後ろの壁際にあるベンチにはスーツ姿の小太りの男性が座っていた。大きな鞄を胸に抱えるようにして眠っているようにも見えたが、今はラッシュ時だ。駅員もちらちらと彼のほうを見ている。

地下鉄構内に風が吹いてくる。電車がホームに入る前に吹く風だ。僕は彼の方を見ると立ち上がるような気配がしたが、気のせいだった。少なくとも今入ってきた電車の時は立ち上がらなかった。電車がホームへと入ってくる。目の前を通り過ぎていくどの車両にも、これまでかというほどに人が乗っている。人々の営み。その本質が今この目の前にある姿となって答えを出しているのだとすれば、これ以上ないほどに辟易としてくる。

僕がそう感じる一方で、そうしているほうが安心できる人もいることは事実だろう。物事の全てを否定することは出来ない。少なくとも大した学歴もなく能力も無い僕には、何かを決め付ける権利も何もない。これは社会人になってまず会社から教え込まれたことの一つだ。もちろん他の多くのことを学び、前向きにも後ろ向きにで

も、今までの自分を壊し、創り、虚勢を張り、立ち向かい、追い詰められ、でも自らで、またこの道へと戻ってきた。その狭い世界の中でも、多くの人が多くの考え方をしていることを僕はぼろぼろになりながらも身を持って経験をした。だから僕は出来うる限り自分が感じた裏側のことを考えるようにしている。それが何かに繋がるかどうかは分からないし、それはまた別の問題だ。

電車のドアが開き、くるりと背を向けてなんとか乗る。この駅は乗る人も降りる人も少ないから、僕が一番ドア側になる。そして鼻先を掠めるようにしてドアが閉まる。億劫そうに電車が揺れてから、ゆっくりと動き出した。隣の女性が少しだけふらついた。

暗く狭い線路から見える光景は、湿ったコンクリートと配管くらいだ。窓を眺めていると半透明の僕の顔が映りだしてきた。

無表情。表情を作る気にもなれない。例え車内に僕一人しかいないとしてもだ。その運転免許証の写真にすらもならないような顔をまじまじと見ていると、地下道の電灯が辺りを照らし出し駅へ着くことを知らせる。明るくなると同時に窓に移る僕の顔が消えていった。反対側のドアが開き、今度は人たちが流れ出る。そして出た人数の半分くらいの人が乗り込んでくる。

ここにいる人たちは何を考えているのだろうか。今日の仕事の段取りだろうか。それとも奥さんの作ってくれた朝食についてだろうか。隣り合った男性か女性のことを考えているかもしれないし、目の前に座っている人が早く降りてくれないかということかもしれない。僕は何を考えてこの道を通ってきたのだろうか。僕が学生の頃、大学へはバイクで通っていた。身なりはスクーター型で大きいのだが、排気量はといえば車検がいらない程度の小さなバイクだった。運転は好きだった。朝、晴れていると気持ちが良かったし、雨だと憂鬱だった。あまりにも酷い天気のときは電車で通った。暖かな季節は風が心地よかったし、寒い季節はこれまでかというほどに厚着をして、厳しい寒さを微塵も感じなくしたときはにんまりとした。上手く書けたレポートがあるときは提出するのが楽しみだったし、

嫌いな講義のあるときは、行かなければならないかどうか出席日数を頭で計算していた。だからつまり、その当時の僕は日頃感じたいたことはほとんど天気かサボるかくらいだったわけだが、日常というものの端にある、小さな何かを感じていたことは間違いない。いまはそれすらない。

ドアが開いた。何人かが人と人の間をすり抜けるように降りていく。僕も続いてすり抜けていく。また今日が始まったんだなと思った。

就職して正社員になるということは、なにか会社に身売りする感じがした。もちろん会社によってマチマチなのだろうが、僕の会社は土日出勤も残業も基本的には会社への忠誠の度合いを測っているだけのように感じた。そこには社会貢献だとか経済の活性化だとか、そういう概念は無い。全部とは言わない。自分のことで手一杯で、せかせかと働いているフリをして人にその姿を見せて、こんなに頑張っているんですよとアピールしているだけに過ぎない人たちがただ大勢いた。生活があるのでクビにしないでくださいと懇願しているようであった。それがその人本人にも他人にも社会にも何らかの生産性を生むようにはとても思えない。見ている人間もそれに気付かないフリをするのが暗黙のルールだった。

綺麗ごとだけを言いたいわけではない。俺が食わせてやってんだ。誰が食わしていると思ってるんだ。そういうことを平気で言う人間は会社に食わせてもらっていることに後ろめたさを感じているのかもしれない。すでに軌道に乗ってしまっている仕事の中で必要なのは我慢と忍耐力と没個性化で、決してやってはいけないのは夢を見ること。芸能プロダクションでもないのに海外でダンスを習って会社に貢献したいというわけでもなく、ごく全うな新事業に関してもそうだと言えるし、既存の改革についても同じだろう。当たり前だが誰もが責任を取りたくもなく、平和に暮らして生きたいと願っている。それに確かに家族を路頭に迷わせるわけにもいかないと言うことは分かる。だが路頭には迷わしてはいないのかもしれないが、

そう言うそばから家にも帰らず遊んでばかりの人を見ると少し腑に落ちない。完璧な人間なんてどこを探してもいない。そんなことは分かっているつもりだ。それでももしかしたら、単純に僕がやはりただの世間知らずで、未だに夢見がちなオトコだからそう思うのかもしれない。

映画やドラマでは、社会の中で破天荒な主役が活躍する物語をよく目にするし、人気もあるようだ。主人公の役柄は学校の教師やサラリーマン、または法律家など他にも数えればたくさんある。要するに多くの場所で、社会全体の多くの部分で閉塞感が満ちていて、そしてそれを誰かに打破してもらいたい。できれば違う場所の違う世界の人間で、それも出来るだけ遠くで。蝶の羽ばたきが世界の裏で異変を起こすようにと願っている。他力本願であるが、すでに本人は気付かずして無意識に願っている事もあるだろう。若いというだけで認められずにその熱を開放することが出来ない少年や少女が大勢いる。自らを自らの意思だけでスポーツや勉学に打ち込むことのできる人は少数だろう。不良少年や暴走族も、それに憧れる少女も、文武に打ち込む青年も映画の破天荒な主人公も、おそらくその根っこの部分は同じなのだろう。閉塞した世界への、その表現方法が違うだけだ。

僕はそこから抜け出す。映画の主人公のようには成れなかったし、成りたいとも思っていなかった。それは人によっては敗走と指を指されることであって、見方によっては決して逃れることの出来ないスパイラルの中で闇雲にもがいているだけかもしれない。猿山にしても同じことだ。どこかで何かの現実を突きつけられて大きく挫折をすることもあるだろう。それでも自らを突き通したならば、と。本人としては充実感を得て年を重ねることが出来るはずだと彼は言うと思う。

俺たちは前を進んでいくことしか出来ない。そう言う猿山の声が耳の奥の後頭部の中間辺りで囁いている。

地下鉄から外に出る階段を上る。外は少しだけ曇りを見せていて、

柔らかく辺りを包んでいる。
最後の出勤を祝福してるんだなと思った。

?

丸くなった求人広告は真っ直ぐゴミ箱には飛ばず、大きく逸れて壁にぶつかった。

満面の笑みを浮かべながらガッツポーズをした男性と、その脇に高収入可能ですと謳い文句の書かれた記事ばかりが載っていて、何一つ興味が出なかった。

多少の貯金に雀の涙ほどの退職金と、退職後の三ヵ月後から振り込まれる失業保険、それと実家にいるということで目先はどうにかはなるが、働かないわけにはいかない。そもそも働く意志が無いわけではない。ただなんの当ても無くまた働き出したところでまた同じことの繰り返しだ。

僕は天職だなんて言葉を信じてはいない。どんなに好きだとしても誰しもが世界チャンピオンになれるわけではない。生活するために無理なく稼げるのが天職なのか、無理してでも巨額の給料を調達できるのが天職なのか、収入が無くとも無理を無理と思わず働けるのが天職なのか。それとも、その全てか、それ以外か。

二階のベランダに出て庭を見ると母親が散水をしている。もともとガーデニングが好きな人だが、いつからか急に庭をバラ庭園にするんだと言い出し、バラの庭園が表紙になっている分厚い本を買ってきては読みふけっていた。それからすぐになにやら肥料やら柵やらを買ってきて庭の手入れにせっせと励みだした。それが二年前で、まだバラ庭園には程遠いのだが、文字通り芽は出てきているようだった。

実家は、二階建ての一軒家造りで五年前に新築したものだ。片田舎なのでそこそこに大きい家だ。ただ前と比べると庭は少し小さくなった。目の前は片側一車線で両側に歩道のある広い通りが走って

いて、滅多なことでは渋滞しないが昼間はそこそこ交通量がある。この庭がバラ屋敷になれば人の目にも触れるだろうから、それを考えれば精が出るのも頷ける。歩きや自転車でよくここを通る人には話しかけられたりもしているようだ。

趣味と仕事の違いはなんだろうか。母親が庭を素敵で綺麗なバラ庭園を作る。もしかしたら、そこからなにかの仕事が生まれるかもしれない。例えば、見ず知らずの人が通りががりに綺麗なバラですね、もしよろしければでいいのですが、一本バラを下さらないかしら？　と尋ねてくる。たぶん僕の母親はお金なんかいいんですよと言って渡すだろう。そういうことが次第に増えたときには、金を取り始めるかもしれない。それは利益を稼ぐというよりも育てるのと手入れにも金がかかるからだ。プレゼントのしすぎで「経営費」が無くなるのは本末転倒だし、人に渡しすぎて庭が貧相になることも望まない。そうなったらなば販売用のバラも育て始めるかもしれない。商売なんかしたことの無い母親は、きっと赤字での提供をするかもしれないから、それを仕事と呼べるかは怪しい。私の庭も見てくれませんか？　という問いに対してもそれと同じことを言うだろう。

誰かがそう言うのならば母親の天職はこれだろうか。いや、そんな言葉は幻想にしか過ぎない。

ベランダから部屋に戻りベッドに倒れこむ。ベッドのスプリングと柔らかい布団の感触が心地悪い。病気になって何日も寝込んでいるときに、ベッドで横たわっているのが苦痛になる感覚と似ていた。いま僕は病気ではない。実はどこか調子が悪いのだろうか。しばらくそのままの格好でいたが、急にこのままじゃ腐ってしまうという感覚が心臓の辺りから鼓動が伝わるように全身を脈打った。それは一秒置きに強くなり、全身に波紋が波打つようだった。まだ退社をして三日目だった。

携帯電話を見るが、もちろん誰からも着信はないし、メールも着ていない。平日の昼間だ。誰もが精力的に働いているのだろう。と

りあえずパソコンを起動させ、ポータルサイトのトップ画面を開くが目新しい記事もないし、調べるようなこともなにもない。
正直、仕事を辞めてみてここまで何も無いとは思っていなかった。会社へ勤め出したとき、黒い一つの水滴が手の甲に落ちた。最初はなにも気にしてはいなかったが、その黒い水滴は一年経ったとき手の甲全体に広がっていた。そして二年が経ち、肘のほうまで黒くなった。そして七年が経ったとき、脇から胸と首にかけても広がり、止まることのない進行に恐怖した。しかし、もしかしたら中途半端に進行を止めるよりも体中が黒く染まってしまったほうが良かったのかもしれない。或いは、会社へ勤めだしたのとは関係なく、その水滴は同時期に落ちてきただけのことだったのかもしれない。だとすれば僕は勘違いをしてしまっただけなのだろうか。そして既に僕の上半身は黒く腐っていっているのだろうか。えも知れない悪臭を放って、ぐちょぐちょと腐った体液で濡れはじめた皮膚から、さらにその下にある肉までを溶かしきっているのかもしれない。
そう思うと恐ろしく不安になる。もう何をしても食い止めることはできないのだろうか。
僕は携帯電話を手に取り、猿山に電話した。今晩、一杯どうかと誘ったのだ。案の定、猿山は電話に出た。相変わらずいつでも電話に出れるんだなと言うと、創作的活動の真っ只中に邪魔すんなと言ったが、誘いに対しては辞めたばっかりで呑みに行っていいのかよ、俺は金出せないぞというようなことを言っていて、まんざらでもないようだった。
僕はもちろん「そこは割り勘で」と答えた。

「エイジはパソコンに詳しく無くて良かったな」僕と猿山の二人だけだというのに、猿山は焼鳥を串から外している。きっと猿山は一人で焼鳥を食べていても串から外すのかもしれない。
「どういうこと？」

「誰とも関わりが持てないから、暇で暇で仕方ないんだろ？いまはインターネットを使えばオンラインゲームとかネット掲示板で誰かと繋がることができるからさ。それで段々と引きこもりになっていく人は少なくないんだってよ」

「なるほどね。あんまし興味は無いんだけど、迂闊に手を出さないほうが良いかも」

「クスリみたいなもんだよ。ネトゲ廃人って言葉、聞いたこと無い？」

「ネトゲハイジン？」

「そう。俺たちも学生の頃は、よく何人かで集まって格闘ゲームとかで対戦したり、人生ゲームを酒でも飲みながらやったりしたじゃん。そういう時って、あっという間に朝にならなかったか？　朝の日差しが気持ち悪くてさ。寝てないのに身体は疲れてなくて、指先しか動かしてないから変な疲労感があってさ。で、頭も回転しない」

「確かにあったね。最近もたまにやったじゃん」

「あれを世界の人とやるんだよ。家の中にいながら世界の人と繋がる」

「廃人、ね」

「まさに、ヤクチューだよ。エイジはそうならないと思うけどさ」そう言いながら抜き取った焼鳥の串を飲み終えたジョッキに入れた。

「でもこのままじゃアルチューになっちゃうかも知れないよ」辺りを見回すと今日の客の入りはかなり入っている。この間とは打って変わって店員がせかせかと走り回っている。

「早くやること見つけないとな。勉強したいこと、見つかったか？」

僕は飲もうと途中まで持ち上げたグラスをテーブルに置いた。「まだ、なにも」

「まだ三日目だから、焦らなくてもいいのかもしれないけどさ。でも、そのままでいたら鬱になっちまうかもな」

「会社に勤めてたときも、そんなに毎日毎日が目一杯に精力的だった訳じゃなかったんだけどさ。こう辞めると、また違うね。金も入らないし」そして、どちらにしても気持ちが病んでいくことは同じだった、と心の中で呟いた。

「へんな勧誘にのらないでくれよ。そういうとき、一本の支えが無いときにはまっちまうのが勧誘だとか、ウマイ話とかなんだからさ」

「大丈夫だよ、きっと。それにサラリーマン生活で疲れてもはまる人ははまるんだよ。俺の感想だけど、日本の会社ってのは一つ一つがそれぞれ国みたいで、みんな会社を心の柱にしてるんだよ。たぶん終身雇用ってそういうことだと思う。愛社精神ってやつ？」

「みんなで会社を盛り上げてこうって言うのは、そんなに悪いことじゃないだろ」

「悪いことじゃない。いいことだよ」

「じゃあいまのエイジはその柱が無いってことは認めるんだな」

「そう考えると、確かに今は少し危ないかも」大きく長い溜息が口から漏れた。

「とりあえず、一日の生活のリズムを作ることが大事なんじゃない」

「家事手伝いでもするか？」

「俺は専業主夫に偏見はないけど、エイジはそれがやりたいわけじゃないだろ」

「まぁね。今はとにかく働きたいんだよ。働くことは楽しかった。何かに一生懸命に打ち込むってことは気持ちがいいし、今までやってきたこと、例えばバイトでもスポーツにしてもなんにしても今までそうやってきた」

「じゃあ、なんで仕事辞めちゃったんだよ。人間関係？」

「人間関係は良かったよ」でも腐ってしまいそうな気がしたんだ。ふと手の甲を眺めた。「今、俺は不安で不安で仕方がない」

「焦っても仕方ないじゃん。そういう時はな…」それから猿山は、

なにか良い方法は無いものかとぶつぶつ独り言を始めた。無理して考えなくても良いと思うが、ここは任せてみようと思った。
腕を組み、唸る。それからこちらを向き、口を開こうとするがやはりまた視線を下に向けて唸る。そして僕は砂肝をつまむ。お互いにそれを何度か繰り返して、僕がもういいよと言おうとしたとき、ぱっと猿山がこちらに顔を向けた。
「育てると良いんだよ。」
「育てるとい良いって、何を？」
「植物を」
「植物？」
「エイジのおふくろさんもガーデニングやってるように、エイジもやってみなよ。朝、水をあげて、手入れしてさ。いきなり動物とかよりも良いと思うし。芽が出て、実を付けさせるのか花を咲かせるのかは知らないけど、芽を成長させるんだよ」
「なるほどね。でも何を育てようか」
それを聞いた猿山は、唇の端を片側だけ持ち上げた。
「いいネタがあるぜ」そう言って一粒の種を僕に差し出した。

?

まったくこいつはと思った。
話のどさくさに紛れて変な種を渡してきたかと思ったら、人目に付くところで育てちゃダメだからな。犯罪者になっちゃうから。なんて言ってくるから、勘弁してくれよという気持ちで一杯になった。ただそれと同時に、同じくらいの興味が湧いたのも事実だった。
一年草だから、普通に植えるならまだ育たない。時期は四月か五月から植えればいいから、もう植えても大丈夫だろう。その時期からでなくても育てる方法はいくつかあるから、どうするか、あとはエイジに任せるよ。部屋でも育つし、外でも育つ。強い植物だからさ。そう言いながら猿山が煙草の煙を吐き出す仕草が目に浮かんできた。見つかってはいけないのなら、いくら強い植物でも育てる場所が無いんだけども、と僕が言うと、五月までだとしても時間はまだあるからしばらくその方法を考えてみ。とだけ答えた。それからいくつかの会話をして、これから創作的活動を行うから今日はもう帰るよと、いつもの自転車に乗って去っていった。
僕は寂れたアーケードの一角にある、くたびれた木製のベンチに座って煙草に火を付けた。遠くを走る車のヘッドライトが夜の雲を右から左に流れ照らしている。この一粒の種をどうやって育てようか。遠くの川原か林に埋めて育てるべきか、家のベランダで育てるべきか。あまり人の目に触れないところだとしても、外で育てることはとても危険なことのように思える。家のベランダといっても、母親が茶々を入れてくることは目に見えているし、それによって栽培の協力を得ることが出来るだろうが、実際に花が咲くのか実が生れば、植物に詳しい母親は異変に気付くだろう。一人暮らしの時であれば、そんな気苦労は無かったのだが、これから一人暮らしをす

るほどの金銭的な余力はないし、今はすぐに就職をする気にもなれない。ダンボール箱か何かにでも入れて育てることが出来るならまだいいが、実際この種から生まれる植物の背丈がどんなものか分からない。どういった類の種かということは分かる気がするが、実際はいったい何なのか分からない。よくよく考えれば、もしかしたら単純に遊び半分に猿山があんなことを言って渡してきただけかもしれない。

まだ時間はある。とにかく図書館やインターネットでこの種について調べることから始めるべきで、今日答えを出さなくてもいいだろう。そう決めて立ち上がった。路地に目をやると一人の女性が歩いていた。僕はすぐに気が付いた。

「この間、会ったね」僕はさっと駆け寄り声をかけた。「今日はマッチはいらない？」

彼女は少し驚いたようだったが、軽く笑って言った。「なにそれ、全然センスのない声のかけ方ですね」僕も合わせて笑った。

「今もバイトの帰り？」

「そうですよ。お友達はもう帰ったんですか？」

「帰ったけど……あの店にいたの？」

「やっぱり気付いてないんだ」彼女が悲しそうな素振を演じる。

「いやいや気付いてるよ。あれだよね、あれ」

「あれって何ですか。もう、いいいですよ」今度は少し怒った素振だ。僕はもっとからかうつもりだったがやめた。

「今日も居酒屋のバイトお疲れさん。人の入りが多かったから疲れたでしょ」

彼女は大きな目を丸くした。「本当に気付いてたんだ」

「まぁね。いつもいつも気になってたんだよ。かわいい人がいるなぁって」

「よく口が回りますね」バックを後ろ手に上目使いで僕の目を見てくる。

「口は回るけどウソは付けないんだよ。帰り道はあっち？」僕は

駅に向かって指を向けた。
「ううん、自転車」彼女は駐輪場に指を差した。
「じゃあ地元なんだ。俺もここが地元なんだ。帰ってきてのは最近だけどね」
「地元じゃないんですが、ここに住んでるんです」と彼女は言う。
「じゃあ今まではどこかに行ってたんですか？」
「遠くの街まで出稼ぎにね」
「それで帰ってきたの？」
「稼ぐだけ稼いでね」
目を細めて僕のことを見る。その目はなにか見透かしたようだった。「ってことは、もう辞めちゃったんだ。いまは就活中ですか？」
「うん、就活中」そう答えてから、なんだか色々と突っ込まれそうな気がしたので、間髪入れずに「学校ってなに専攻してるの？」と聞いた。
「園芸ですよ。ほとんど肉体労働ですけど」
「ガーデニングみたいの？」
彼女は頷く。
「うちの母親も好きでね。庭をバラ園にするんだって言ってがんばってるよ」
「バラは難しいんですよね。すごいお母さんですね」
「温かくなると虫が大量発生するけど」
「でも素敵じゃないですか」
「そうなったら素敵は素敵だろうな。夏場になると、汗だくだくでなにか作業してるよ」
「雑草を抜いたり、肥料をまいたり、してるんじゃないのかな」
「玄関のところにアーチがあってね、そこにバラを巻こうとしてるんだけど……」
「たしかにそれじゃ汗だくになっちゃいますね」
彼女はそう言いながら駐輪場に向かって歩き出した。

「俺もなにか育ててみようかな」
「植木鉢でなにか育ててみればいいじゃないですか。一年草でも、今から準備すればぜんぜん間に合いますよ」
「そういうのあるんだ。まったく詳しくないんだ」
「一年草と多年草っていうのがあるんですけど……。話聞きます？」
「いま聞いても覚えてなさそう。酔っぱらっちゃってるから」僕は笑った。彼女も、ですよね、と笑った。
「なにを買えばいいのかわかりますか？」
僕は少し右斜め下を見て考えた。考えたが、思いつかない。思いつかないというよりも、知らないだけだろうとすぐに気が付いた。
「植木鉢と土、それとツタが巻いていく棒、かな？」
「アサガオでも育てるんですか」とアサガオのように、ぱっと笑顔になった彼女を見て、僕は少しだけどきっとした。
「なにを育てるのか決めてないんだけどさ。じゃあとりあえず植木鉢と土だね」
「植木鉢の下に細かい軽石をひいたほうがいいですよ」
「わかった」なぜひくのかは分からなかったが、ひいたほうがいいのが分かったという意味で答えた。
「付き合いましょうか？」
僕はまたどきっとした。「いいの？」
「構わないですよ。うちのお店の常連さんだし」
「そゆことか」僕は小さく呟く。
「なんですか？」
「なんでもないよ」
「いつ行きますかあ？」
「時間だけは持て余してるから」笑ったつもりが、苦い笑いになってしまった。
「今週の日曜日いこうよ」彼女は思いついたように顔を上げて言った。

「うん、お願いします」僕は頭を下げて言った。「ところでさ、名前はなんて？」
「わたしの？」
僕は、そうだよと言った。
「名前、知らないですよね、そういえば。顔だけは見慣れちゃってるから、知ってるものだと思っちゃった。わたしはサキっていいます」
「俺はエイジ」
サキは微笑んで、「知ってますよ」と言った。「お友達がいつも大きな声でエイジエイジって言ってるから、うちのホールのメンバーみんな知ってますよ」
「それ聞いたらなんだか、行きづらくなっちゃったよ」
「また来てくださいよお」
「なんだかんだ行くと思うけどね」
駐輪場に着くと、ちょっと待っててくださいねと言い、サキは中へ入っていった。僕はジャケットの内ポケットから携帯電話を取り出して見てみるが、今日も誰からも着信はなかった。履歴を追っていくと、前の仕事での取引先の番号がまだ残っている。以前ならとっくに消えてしまってるだろうなと思った。前に一緒に美術館に行った子は元気でやってるだろうか。僕は素敵な女性だったなと思い返す。仕事を辞める少し前から連絡を取らなくなってしまったが、久しぶりに電話でもしてみようか。付き合うことにも体の関係もなかったのは多分、僕が臆病者だったからなのだろう。タイミングというのはきっと重要で、いまはもうそのタイミングは逃してしまったのだとは思っているが、それでもまた会ってどこかに行ければな。
「おまたせです」折り畳み自転車だろうか、小さくてかわいらしい自転車を引いてやってきた。
「帰り道は？」
「あっちだよ」と僕の道とは反対の方向を指差した。
「じゃあ逆だ。ここでお別れだね。サキちゃんの番号教えてほしい

な」
うん、と言って、小さな前カゴに入ったバッグの中から携帯電話を取り出した。
「日曜日はお昼くらいで平気？」
「平気ですよ」
「またメールするよ。気をつけて帰ってね」
サキは、はーいと言って手を上げて自転車を進めていった。
僕は、サキが小さな自転車をこいでいく小さな後ろ姿を見て、素直にかわいいなと思った。日曜日が楽しみだ。買い物の帰りにちょっと素敵な店で飲んでもいいな、収入はないが、まだ金はある。頭の中にある、嫌な不安の部分には触れないようにして、気分が良いまま鼻歌でも歌いながら帰ろうか。そうしようとポケットに手を突っ込むと、指の先に慣れない感触を感じて、思い出した。
小さな透明なビニールパックに入った、一粒の種。種を見るだけで、なにが育つか分かるものだろうか。図書館で調べようと思ったが、もうどうにでもなれ。日曜日に買って、月曜日に植えてみよう。

?

サキの姿がとっくに消えていき、少しだけ酔いの冷め始めた頭をふらふらと揺らしながら歩いていると、どういうわけか無性に寂しさが込み上げてきた。裏道の通りの一角にある小さな神社には、くすんだ色をしているシーソーが街灯のライトの端に照らされていて、なんだか僕と同じなんじゃないかなと思った。右側が下に傾いていて、僕はそこに腰を下ろす。ほんの少しだけ、きしんで、高くて耳障りな音が響く。幼い頃、夜の神社に近づくことはなかった。幼稚園でも、小学校でも僕が一番の怖がりだった。薄く湿った感じが漂う神社を視界に入れるのも嫌だったので、いつも違う道で帰っていた。久しぶりに実家に帰ってきたからだろうか、こんなことを最近はよく思い出す。その当時の僕は、いやきっと誰もがテレビや絵本で見たことがそのまま現実にシンクロしてしまって、さらに想像力は掻き立てられて様々なことが生まれてきた。昼間に見るシーソーと夜に見るシーソーは同じシーソーでも同じではなかった。今は朝に見るシーソーも昼に見るシーソーも夜に見るシーソーも春に見るシーソーも夏に見るシーソーも秋に見るシーソーも冬に見るシーソーも晴れの日に見るシーソーも雨の日に見るシーソーも雪の日に見るシーソーも変わらない。乾いてるか濡れてるか、熱を帯びてるか冷えきってるか、触れてみて初めて分かるだけだ。

古くなったものには神様が宿ると幼い僕に教えてくれた祖母は、十年も前に記憶が酩酊しながら死んでいった。優しい人だった。いつもエイチャンエイチャンと僕のことを呼んで、お父さんにもお母さんにも内緒だよと撓れた口の前に撓れた人差し指を持ってきて、百円玉やお菓子をくれた。僕は家のすぐ横にある小さな酒屋に行って、駄菓子を買ってくると、これはおばあちゃんのぶんと言って渡した。本当は自分で全部を食べてしまいたかったけれど、頭を撫で

てくれながら、偉い子だね、じゃあひとつお話をしてやろうかね、そうやって話してくれる物語を聞くことが好きだった。祖母は、どんな物語にもならずに生涯を終えた。そのことを悲しく思う人間はいないだろう。ほとんどの人間が忘れ去られるからだ。一部の過去偉人は永遠に記憶されると言うが、僕はそうは思わない。その人間を知っている人間はもう誰もいない。記憶されるのは偉人ではなく、偉業だ。偉人がどんな人間だったか書いてある文献はどれも懐疑的な感がつきまとう。そんなことはどうでもいい。祖母自身が自分自身のことを忘れてしまったまま死んだことが悲しい。死後の世界は信じてるわけではないが、もしそれがあるのならば、そこに祖母がいるのならば、記憶が戻っていてくれればと思う。記憶が戻らずに、ただ死後の世界にいるのならば、きっと祖母はあちらこちらをさまよいながら、町内放送で呼ばれていることだろう。もし記憶が戻っているのなら、僕と祖母が、温かい春の日に散歩をしながら公園まで歩いてシーソーに乗りながら、スーパーで買った甘くて科学的な黄緑色をしたジュースを一緒に飲んだことを思い出してほしい。それと、僕がどれだけ端に寄ってもシーソーは祖母の側が降りていたことも。

ふと小さな明かりが付いたような気がした。

小さな明かりはチカチカとせわしく揺れて、消えていった。

白い自転車に跨がる警察官がいた。僕のことを一瞥して、なにも訪ねずにまた自転車を走らせてパトロールに行ったようだった。

？（前書き）

何を着ていこうか迷ったが、タイトなシルエットで濃いインディゴ染めのジーンズに丈の短い仕立ての良い白いシャツを着て、山吹色のニットカーディガンを羽織り、それでは地味すぎるなと思ったのでハウンドトゥースのハウンチングを被った。

車は昨日洗車をした。洗車をしているときに、こう気合がはいってるのはなぜなんだろうななんて考えているとなんだかおかしな気持ちにはなったが、古い四駆なのだからせめて見た目を綺麗にするのはマナーだろう。

サキと日曜日のことでメールで連絡をとると、すぐに大きなホームセンターは街の外れにある。だから車で行こう、駅まで迎えにいくよという話になった。約束の時間まであと二十分ある。早く着きすぎたかもしれない。

正直、種がいったいなんなのかということはあまり気にならなくなってきている。植えて芽が出ればそれでいいし、出なくてもそれでいい。僕はいまサキと一緒に出かけるということのほうが楽しみだ。サキとはあの日以来といっても、ほんの数日間だが、会ってはいない。飲みに行くことはもちろんできたが、なかなか足が向かなかった。

携帯電話を取り出して履歴を見ると、相変わらず見慣れたものだったが、メールの履歴だけはサキという名前で埋め尽くされていて、邪魔をするようにところどころに猿山という名前があるだけだ。メールは返事がないと淋しい気持ちになってしまうのであまり好きではない。サキはバイトの時間と思える時以外はちゃんと返事をして

?

くれた。猿山なんかに言わせればメールをすぐに返さないのが駆け引きということらしいが、僕はあまりそういうことはしないし、自分がされて嫌なことはあまり人にしたくないので、できるだけすぐに返事をするようにしている。

携帯電話がぶるぶると震えた。

サキからのメールだった内容は、いま駅に着いたというものだった。

ロータリーにいるよ。白い四駆です。というようなことを打ち込んで送信した。僕はハンドルに寄りかかるようにして周りを見渡す。

色とりどりの細かい柄のふんわりとしたシルエットで、踝まで丈のあるワンピースを着ている女の子が目に入った。肩までかかる明るい茶色の髪の毛がサキのようだなと思った。もしもあの子がサキだったら男名利に尽きるよな、そんなことを考えて彼女を見ていると、次第にこちらに近づいてきて、軽く手を振った。僕は少しだけ胸を高鳴らせながら、手をあげて返事をする。

「お邪魔します」ドアを開け、サキは軽く頭を下げながら助手席に座った。

「そんなにいい車じゃないけどね」

「大きくてかっこいいですよ。自分の車なんですか？」

「ファミリーの車なんだよ。前の仕事で必要でもなかったから、買ってないんだよね」

「買わないんですか？」

「休日ならとりあえずこいつが使えるから、すぐには考えてないかな。車の前に仕事みつけなくちゃだし」と僕は微笑む。

「エイジさん、明るいからすぐ見つかりますよ」

「ありがとね」

ギアをバッグに入れてから、助手席に手を当てて後ろを見る。いつもやっている自然な動作のはずなのに、なぜか僕がどきどきとしてしまい、ちぐはぐな動きをしてしまいそうになったが、たぶんいつもと変わらずに車を出すことができただろう。

「じゃあ、行こうか」
「お願いします」とサキが言ってから、くすくすと笑い出した。「なんだか不思議な感じがしますね」
「なにが？」
僕は前を向いたまま訪ねた。
「エイジさん、しらふだし、外はまだ明るいのに会って話してるのって、なんだか不思議だなって」
「言われてみればそんな気もするけど」
「しらふだったら、マッチ売りの少女な気分にはならないもんね」
「やめてくれって」
サキが僕の顔を下から覗き込むように屈んだ。長い髪がさらさらと音を立てて流れたような気がした。
「赤くなってますよ」
「なってない、なってない」
「うちのお店で、くでんくでんに酔っぱらってくれてればよかったのに」
「ネタにしようとしないでよ」
「見てるのは楽しい」
「笑いながらひどいこと言わないの」
「でも、しつこいお客さんもいるから、たまにはいいと思いません？」
「しつこいって？」
「番号おしえてよー、とか、ブラのサイズいくつなのー、とか」
「そんなこと言われるんだ。言われないよりかはいいんじゃない」
意識はしていなかったのに、条件反射のように僕はちらりとサキの胸を見る。ふんわりしたワンピースからでは分かりにくいが、細身のわりには胸があるのかもしれない。
「いやですよー。とくに胸とか盗み見る人」
「え？」
「なんでもないですよー」

僕は軽くアクセルを踏んで、黄色信号へ突っ込んでいった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8983i/

ユートピアの葉

2010年10月9日02時51分発行